

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 関 ソラ

論文題目 現代日本語における
カテゴリーの周辺例を明示する表現に関する考察

論文審査担当者

主 査 名古屋大学 准教授 李 澤熊
委 員 名古屋大学 教授 堀江 薫
委 員 名古屋大学 教授 杉村 泰
委 員 名古屋大学 准教授 永澤 済

本論文は、現代日本語における「カテゴリーの周辺例を明示する表現」を対象とし、各々のカテゴリー化の様相に注目して、「カテゴリーの周辺例を明示する表現」としての特徴について認知言語学的な観点から考察したものである。なお、考察対象とした表現は以下の通りである（10 表現）。

「ぎりぎり X (である)」「X の端くれ」「まるで X (である)」「もはや X (である)」「X と言えなくもない」「X とも言える」「X というのもおこがましい (Y)」「X とは名ばかり (の Y) / 名ばかり (の) X」「大した X ではない」「X っぽくない」

これらの 10 表現は、先行研究において「カテゴリー化」に関わるという観点からはほとんど考察されていない。また、これらの表現がカテゴリーの周辺例を明示する際の意味・用法についても明確に記述されているとは言い難い。本論文は、先行研究をきちんと整理・検討し、これらの表現が「カテゴリーの周辺例を明示する表現」としてどのように位置づけられるかを明らかにしている。また、豊富な実例を的確に用いて、個々の表現の意味・用法について、緻密かつ精緻な分析を行っている。

以下、本論文の概要と評価の結果を報告する。

[本論文の概要]

第一章の序論では、研究の目的と考察対象、及び本論文の考察方法について述べている。

第二章では、本論文で援用する諸理論を概観した上で、「カテゴリーの周辺例を明示する表現」に関する先行研究について整理・検討している。

第三章から第七章にわたって、本論文の考察対象である 10 個の表現をその特徴が類似しているもの同士を 1 つのグループにし、全部で 5 つのグループに分け、精緻な意味記述を行っている。以下、概要を述べる。

第三章では、「カテゴリーの周辺例を明示する表現」の中で、話題の対象があるカテゴリー X の境界に近いことを表す「ぎりぎり X (である)」と「X の端くれ」について考察している。「ぎりぎり X (である)」は、「境界に近い」ということが非常に重要であり、カテゴリーの境界及び、成員間に「X らしさ」の差があるかどうかにより、カテゴリー化の様相が異なるため、① X がプロトタイプ・カテゴリーである場合と、② X が必要十分条件に基づくカテゴリーである場合に分けて考察している。①の場合は、カテゴリーの境界があいまいであり、成員間に「X らしさ」の差も大きいため、話題の対象が X の成員であるかどうか重要な問題となり、最も X らしいと話者が判断する中心例（典型例・顕著例・理想例・ステレオタイプ）に照らし、X の成員であるかどうか判断され、それと異なることから周辺例として X の境界に近いところに位置づけられる。②の場合は、境界が明確で、成員間に「X らしさ」の差がなく、X の中心例が存在しないのが特徴である。そのため、カテゴリーの際は X に属するための条件を満たしていれば、X の成員として位置づけられる。ほとんどは時間・数値などに関わるカテゴリーであり、その時間・数値などが基準（境界）となり、その基準に近ければ「ぎりぎり X (である)」が用いられる。「X の端くれ」は話者の評価が強く感じられる表現であり、「X の端くれ」を用いることから生じる表現効果によって異なるカテゴリー化の様相が見られる。①謙遜は X の中心例が (+) の評価性を持つことに焦点が当てられ、話者が中心例である可能性があるにもかかわらず、自分自身を周辺例として位置づけることで、わざと (+) 評価を

避ける。このような話者自身の周辺例としての位置付けと聴者（読者）が知っている実際の位置の食い違いから謙遜の意味が生じると言える。②軽蔑はXの周辺例が（－）評価性を持つということに焦点が当てられ、話者が自分以外の人を悪く評価する際に用いられる。③自慢はXの周辺例であってもXの成員であることに焦点が当てられ、④認定は話題の対象がXの周辺例に位置づけられることに（－）ではない評価が持たされ、Xの成員であることを認める意味となる。「Xの端くれ」におけるXは職業・身分である場合が多く、中心に行くほど（＋）評価が強くなり、中心例は理想例であり、理想例と異なることから話題の対象が周辺例としてカテゴリー化される。「ぎりぎりX（である）」（Xがプロトタイプ・カテゴリーである場合）と「Xの端くれ」は、話題の対象をXの中心例と比較し、それと異なることから周辺例としてカテゴリー化するという点と、Xの中心例から成る下位カテゴリーを拡張し、その拡張したXの中に周辺例として位置づけるという点において共通点が見られる。一方、「ぎりぎりX（である）」の話者の焦点は「話題の対象がXの成員であるか否か」にあり、その境界の向こうに別のカテゴリーの存在が含意され、「Xの端くれ」の話者の焦点は「話題の対象がXの理想例であるか否か」にあり、話題の対象がXの成員であることは明確であるという点において異なる。

第四章では、「比喩」用法が見られる表現である「まるでX（である）」と「もはやX（である）」を対象に考察を行っている。「まるでX（である）」と同じく、「もはやX（である）」にも「比喩」用法があるにもかかわらず、従来その用法については十分な記述がされてこなかった。両表現が「比喩」用法で用いられる際、カテゴリー化の様相が見られるため、ここでは両語の「比喩」用法に焦点を当て、カテゴリー化の様相について分析している。両方ともXの成員ではない話題の対象を、Xの成員と類似しているためXにカテゴリー化し、その中心例（典型例・顕著例・理想例・ステレオタイプ）と異なることからXの周辺例として位置づけ、Xの中心例から成る下位カテゴリーを拡張し、その拡張されたカテゴリーにカテゴリー化するという点で共通点が見られる。しかし、「まるでX（である）」のXは話題の対象の持つある性質が顕著に現れるカテゴリーであり、「もはやX（である）」のXはあるプロセスにおける究極的な目標点・終着点である点、「まるでX（である）」は話題の対象とXの類似性にのみ話者の焦点が当てられるが、「もはやX（である）」は話題の対象の持つある性質が段階的に強くなると、究極的にXにカテゴリー化されるということに話者の焦点が当てられるという点において違いが見られる。また、「もはやX（である）」は話題の対象の本来のカテゴリーがXとある程度類似していても用いられるという点、否定形にしてもカテゴリー化に関わる意味を持つという点において、「まるでX（である）」と異なることを指摘している。

第五章では、「カテゴリー化」に関わる「と言う（言える）」を含む表現である「Xと言えなくもない」と「Xとも言える」を対象に、「カテゴリー化の様相」に注目し考察を行っている。「Xと言えなくもない」は「Xとも言える」に比べて、話者の態度がやや消極的な表現である。考察においては、「Xと言えなくもない」が用いられる4つの場合におけるカテゴリー化の様相について考察している。①先行する発話やそれにより生じる含意を否定する場合は、話題の対象がXの成員ではないという相手の意見を否定し、話題の対象をXの周辺例として位置づける。②生起・可能性・存在が皆無でないことを主張する場合は、別のカテゴリーの成員である話題の対象をXの周辺例として位置づけ、Xである可能性があることを示す。③断定・直接的な言い方を回避する場合は、話者自身は話題の対象をXの中心例に近い成員であると考えているが、自分の意見を和らげるため、周辺例として位置づける。④和らげ・配慮を表す場合は相手と異なる意見を持っていても、相手の意見を

配慮し、X の成員ではないと考えている話題の対象を X の周辺例として位置づける。①と②の場合は X の中心例（典型例・顕著例・理想例・ステレオタイプ）と比較し、それと異なることから、X の中心例から成る下位カテゴリーを拡張させ、話題の対象を周辺例として位置づけ、③の場合では話題の対象が中心例と類似していると考えているが、自分の意見を和らげるため、X の下位カテゴリーを拡張させる。④は話題の対象を X の中心例と比較しないため、X の拡張も見られない。「X とも言える」もそれが用いられる理由によって 4 つに分けて分析を行っている。①和らげは「X と言えなくもない」の③と類似しており、話題の対象が X の中心例に近いと考えていながら、自分の意見を和らげ、周辺例として位置づける。②比喻は別の認知領域の別のカテゴリーの成員である話題の対象が、X の成員と類似していることから、X に周辺例としてカテゴリー化する。③言い換えは、別のカテゴリーの成員である話題の対象を異なる観点から見ると、X にカテゴリー化することができることから、周辺例としてカテゴリー化する。④誇張は、X が話題の対象の持つ特徴を顕著に持っているカテゴリーであり、その特徴を強調するために話題の対象を X の周辺例として位置づける。「X とも言える」においても、②と③において X の拡張が見られるが、②は話題の対象と比較される X の中心例が典型例・顕著例・理想例・ステレオタイプであるが、③は典型例・顕著例・理想例であるという点が異なる。また、①は話者が自分の意見を和らげるために X の中心例から成る下位カテゴリーを拡張させ、その拡張された X の周辺例として位置づけるため、X の拡張が見られるが、④は X の中心例と比較せず、X の拡張も見られない。「X と言えなくもない」と「X とも言える」は、カテゴリー化の様相やそれぞれの用法において共通点が多く見られるが、「X とも言える」が「話題の対象を X にたとえる用法」と「話題の対象のある特徴を誇張する用法」で用いられる場合、「X と言えなくもない」に置き換えられず、「X とも言える」が X とは別のカテゴリーの存在を含意するという点においては違いも見られると指摘している。

第六章では、「再カテゴリー化」が見られる「X というのもおこがましい (Y)」と「X とは名ばかり (の Y) / 名ばかり (の) X」を対象に、「カテゴリー化の様相」に注目して考察を行い、「カテゴリーの周辺例を明示する表現」としての特徴を明らかにしている。「X というのもおこがましい (Y)」と「X とは名ばかり (の Y) / 名ばかり (の) X」は、両方とも話者の評価性が強く現れる表現である。Y が明示されるかどうかによってカテゴリー化の様相も異なるため、ここでは、まず Y の有無により分けて考察を行っている。両表現とも Y が明示されない場合は、X の成員である話題の対象が X の中心例（典型例・顕著例・理想例・ステレオタイプ）と異なることから、X の周辺例として位置づける。Y が明示される場合は、X の成員である話題の対象が X の中心例と異なることから、X の周辺例として位置づけられると同時に、Y の成員としても位置付けられ、再カテゴリー化が見られる。また、話者が X を X の中心例から成る下位カテゴリーに縮小させることにより、X の周辺例として位置づけられた話題の対象が X の成員から除外される意味となる。基本的には両表現とも X の中心より周辺のほうが、X より Y のほうが（－）評価性を持ち、X の周辺例（Y の成員）として位置づけられる話題の対象も（－）評価を受ける。ただし、「X というのもおこがましい (Y)」は、Y より X のほうが（－）評価性を持つ場合も用いられることがあり、それは話者が自分自身を低く評価したり、相手を高く評価したりする場合であると考えられる。このような場合、「X とは名ばかり (の Y) / 名ばかり (の) X」は用いられない。また、「X というのもおこがましい Y」は話題の対象を X にカテゴリー化することは分不相応なことであるという、話者の主観的な判断を基に、話題の対象を Y に再カテゴリー化すべきであるという話者の主張が表れないと用いられないが、「X とは名

ばかりの Y」は話題の対象が X という名称を持っていないが、X の属性を持っていないことに焦点が当てられ、単に話題の対象の正体が X ではなく Y であるという事実を表す時も用いられる点において違いが見られると指摘している。

第七章では、否定を含む表現である「大した X ではない」と「X っぽくない」を対象に、両表現の 카테고리化の様相について考察している。「大した X ではない」は、話者の評価が強く現れる表現であり、話者が 카테고리 X の中心例と話題の対象に対して持つ評価性によって、 카테고리化の様相も 2 つに分けられる。一つ目に、X の中心例（顕著例・理想例）より話題の対象の評価性が（-）である場合、話者の話題の対象への非難や疑問などの態度が感じられる。二つ目に、X の中心例より話題の対象の評価性が（+）である場合は、話題の対象が X の中心例よりはいいと評価され、心配するほど深刻なものではないという態度が読み取れる。また、両方とも話題の対象が X の顕著例・理想例と異なることから、注目に値しないという態度も現れる。「大した X ではない」の話題の対象は本来 X の成員でなければならず、X の内部において、中心例と異なることから周辺例として位置づけられる。「X っぽくない」は、話題の対象が本来 카테고리 X の成員であるかどうかによって 카테고리化の様相が異なるため、①話題の対象が X の成員である場合、②X の成員ではない場合、③X の成員であるかどうか不確かな場合に分けて分析している。①の場合、話題の対象は X の中心例（典型例・ステレオタイプ）と異なることから、X の内部において周辺例として位置づけられる。②の場合は、X の成員ではない話題の対象が X の成員が持つ属性を持っていることから X に 카테고리化されるという意味で、再 카테고리化が見られると言えるが、X の中心例とは異なることから、周辺例として位置づけられる。③の場合は、話題の対象が X の成員であるかどうか不確かであるため、話者がその正体に疑問を持っているか、未定・不特定の物事に対して言及する場合に当たる。「大した X ではない」と「X っぽくない」は両方とも 카테고리 X の縮小が見られ、話題の対象が X の周辺例であることから、縮小された X の下位 카테고리（中心例から成る 카테고리）に入らず、まるで話者によって X から除外されるような意味になる。話者の焦点が「話題の対象が X の中心例であるかどうか」に当てられる「大した X ではない」は、「中心例ではないが、X の周辺例ではある」という意味を持つが、「X っぽくない」は話者の焦点が「X の成員であるかどうか」に当てられるため、「X の成員としてみなすことができない」という意味となり、X から除外されるという意味がより強くなると考えられると指摘している。

第八章では、第三章から第七章における考察結果に基づき、10 個の表現の特徴をまとめ、「カテゴリーの周辺例を明示する表現」の下位分類を試みている。また、「カテゴリーの周辺例を明示する表現」としてどのように位置づけられるかについても検討し、最後に本論文の意義と今後の課題について述べている。

【本論文の評価】

本論文は、現代日本語における「カテゴリーの周辺例を明示する表現」の特徴について認知言語学的な観点から明らかにした好論文である。本論文が高く評価できるのは以下のような点である。まず、カテゴリーの周辺例を明示する表現に関する先行研究が十分に整理・検討されており、問題点などの指摘も妥当である。また、個々の表現の意味・用法の記述においては、従来の研究よりも緻密かつ精緻な分析がなされている。一方、審査員からは以下のような指摘もあった。まず、本論文の理論的基盤となる「カテゴリー」「カテゴリー化」の概念について、背景説明を含め、より分か

別紙 1 - 2

りやすく記述する必要がある。また、類義語分析の方法論についてもさらに考察を深める必要がある。特に、分析結果（各表現の類似点・相違点）については、例えばアンケート調査を行うことによって客観性を高めるなど、より説得力のある記述が求められる。しかし、上記のようなさらに検討・改善すべき点はあるものの、全体的に非常にまとまりのあるものに仕上がっており、完成度の高い論文であると評価できる。また、現代日本語のカテゴリー化に関わる表現の意味研究の一助となったことも高く評価できる。

以上の評価に基づき、審査員は全員一致して、本論文が博士学位論文として十分にその水準に達していると判断した。